

海における死

—Stephen Crane の “The Open Boat” とその周辺作品に見る作家の語（騙）り、
イタリア（人）、移民、そして歴史—

増 崎 恒

Death in the Sea:

Stephen Crane's “The Open Boat” and Other Stories Entangled with Multiple Narratives
about Italy/ Italian, Immigration, and U. S. History

Ko MASUZAKI

は じ め に

1935 年、米文学作家 Ernest Hemingway はサファリ旅行記 *Green Hills of Africa* を著す。その中で、“The good writers are Henry James, Stephen Crane, and Mark Twain.”、“Crane wrote two fine stories. *The Open Boat* and *The Blue Hotel*. The last one is the best.”、“[Crane] died. That’s simple. He was dying from the start.”、と述べる（22-23）。^{注1}人間の運命を決定付ける要素として遺伝と環境を重視する自然主義文学が 19 世紀末の米国で開花する。その先駆者の 1 人、米文学作家 Stephen Crane（1871-1900）の短編作品 “The Open Boat”（以下、OB と表記）を「優れた作家たち」（good writers）による「優れた物語」（fine stories）の好例、と Hemingway は評する。OB の作品（物語）世界は時空を越えて、20 世紀を生きる彼を魅了する。その際、“died” や “dying” を伴って Crane に付き纏う「死」が注視される。夭逝した作家を述懐しつつ、主要登場人物の死を通して強調される、作品を貫く「(生と) 死」という大きな主題、それを鋭敏に感じ取ったに違いない。複数の Crane 作品を挙げて優劣が付けられる。Crane 作品群に広く目を配り前述の主題に何らかの意味を見出したと考えられる。OB の結尾に据えられる「死」から波及する〈OB と死〉に潜む問題の奥行と広がり考究する手始めに、Crane が OB を発表した経緯と OB の周辺に位置する作品の（従来の Crane 研究が推奨する、テキストの〈正統的〉な読みによって裏打ちされる）相互関係は無視できない。

1896 年の大晦日、フロリダのジャクソンヴィルからキューバ独立支援者たちが海路キューバ

へ向かう。キューバ情勢を取材する目的で Crane は彼らに帯同する。途上、船が座礁・沈没する。作家は（救命）ボートで海上を漂う。岸に最終的に辿り着くも、同乗者で Billy (Billie) の愛称で呼ばれる給油係 William Higgins は落命する。この海難事故体験を直に綴った 1 人称の手記 “Stephen Crane’s Own Story”（以下、“Own Story”と表記）が 1897 年 1 月、NY 市の新聞を含む複数の新聞に掲載される。手記終盤、ボートで漂流を余儀なくされた作家の顛末が簡略的に淡々と明かされる (9:94)。そこに虚構要素が付加される。人間の生存本能から迸る魂の叫び、海の冷酷非情さ、がボート上の人間模様に重なり、3 人称で語られる短編 OB に結実する。同年 1 月から 2 月にかけて執筆され、6 月に雑誌に掲載される。事故体験に「触発され」て、物語的な「広がり」(breadth) を備える、創作色の濃い 3 人称の短編作品 “Flanagan and His Short Filibustering Adventure”（以下、“Flanagan”と表記）が同年 3 月に書き進められ、10 月に雑誌に掲載される (Wertheim and Sorrentino, *Log* 221, 236, 239, 240, 246, 272)。

Crane と親交があった英国作家 H. G. Wells は 1900 年の書評記事の中で、OB と “Flanagan” はいずれも「キューバ（に赴く途中で遭遇した海難事故）から着想を得た」(all I got out of Cuba)、とする Crane の証言を紹介する。OB と “Flanagan” の双方を、別物ではなくて連続し関連する短編として Crane は意識していたと推察される (Weatherford 271)。これを踏まえて、手記 “Own Story”、海洋短編 OB と “Flanagan”、後者を併録して単行本の形で 1898 年に米国と英国で出版された短編集 *The Open Boat and Other Tales of Adventure*、*The Open Boat and Other Stories*（以下、米国版 OB、英国版 OB とそれぞれ表記）、海難事故遭遇の一因となった、「（親キューバの立場からキューバの独立を支援する）米国の不法戦士事業」の実態を 1896 年 12 月頃に取材して 1897 年に新聞に掲載された記事 “Filibustering Industry” を一括りにして〈OB とその周辺作品〉と小論では位置付ける (Wertheim and Sorrentino, *Log* 224, 252, 297)。

時系列に沿って、Hemingway の感銘を誘った筈の OB の最後に置かれる死、及びそれに類する死、を OB とその周辺作品から一文単位で抽出する。“Own Story”では “[John Kitchell of Daytona] went after the captain, but the captain sent him to me, and then it was that we saw Billy Higgins lying with his forehead on sand that was clear of the water, and he was dead.”、OB では “[The oiler’s] forehead touched sand that was periodically, between each wave, clear of the sea.”、“Flanagan”では “Later there floated to them a body with a calm face of an Irish type.”、となる (5:92, 108; 9:94)。注² “Own Story”では死者に具体的な人名が与えられる一方、OB は「給油係」(oiler) と職業が簡約的に、対して “Flanagan” は「アイルランド人の典型」(an Irish type) と出自が茫漠と語られる。従来の Crane 研究は、OB における給油係の死を、作品の評価を決定する重要な要素とみなしてきた。例えば、彼の死を「驕心による集団からの離脱」が招いた結果と見て、教訓譚として回収する。「皮肉」の表出と見て、「簡略化」と「曖昧さ」の手法と連動した「象徴」に富む物語として審議する (Cady 154-55; Katz 28; Solomon 159, 174, 175)。また、彼の死は “Flanagan” と密接に関わり、両短編

(が描く死)を通して「英雄の資質」を作家は追求していると指摘される。OBの「洗練された文章」に対して、“Flanagan”はその「不明瞭な文章」、「物語展開における緊張感の欠如」、「凡庸な題材」が指摘される。借金返済のために書かれた駄文と酷評される。OBと対照的に「素材」と「技巧」の両面で軽視されてきた(Katz 27; Knapp 155; Sorrentino 234; Weatherford 222-23)。

他方、“Flanagan”の最後に置かれる「死体」(a body)は物語文脈上、主要登場人物 Flanagan の成れの果てと理解される。作品を跨いだ OB の給油係と Flanagan の相似性、両者の〈死〉が〈アイルランド人の死〉で括られて繋がる可能性、が仮説として呈示される(Solomon 158)。具体的に特定可能な筈の死が〈一般化〉された〈非米国的〉な死にすり替わる。この着想を出発点として、小論では両短編を互いに係留する2つの〈海における死〉が作品発表当時の米国で持つ意義に着眼する。近年 Crane (の作品)の再評価が進んでいる。OBは、19世紀末の米国の「飲(禁)酒言説」と紐付けられる。頻発する「海難事故」に対する作家と時代の関心の表れと捉えられる(Brown 121; Monteiro 177)。作品(もしくはテキスト)の〈外側〉にある時代背景と社会文化状況に批評の目が向けられる。これらの研究の成果を小論で展開する論議の視野に入れる。

(Crane 作品の)読者層について一考する。OBは雑誌所収の短編として活字化されて世に出る。雑誌の出版元 Charles Scribner's Sons 社は「教養のある中産階級米国人」用の雑誌・書籍を刊行していた(Robertson 44)。従って、同社の拠点、ニューヨーク(以下、NYと表記)市に住む彼らを同雑誌及びOBの読者として想定していたと推測される。1896年1月の手紙の中で、独立宣言採択前後の時代に植民地代表として大陸会議に招聘された同姓同名の先祖を作家は旧懐する(Wertheim and Sorrentino, *Correspondence* 166)。米国建国の「歴史」、自身の(米国建国の父祖に繋がる)出自への作家の拘りが窺える。これはCrane作品と無関係と思われない。1893年、作家は中編作品 *Maggie: A Girl of the Streets* (以下、Maggieと表記)を、単行本第1作として世に出す。NY市中のスラム街で生活する下層階級移民の日常が描かれる。1890年代、欧州からの移民数が急増し米国で問題視される。大半がNY港を経て米国内に達する(Senner 2)。喫緊の移民問題全般に向けられる中産階級米国人の意識と最大の移民受け入れ窓口、NY市が連続していなかった筈はない。

作家(と作品の先に見据えられる当時の読者)は、米国建国の父祖に自らの起源を見る。米国建国以来の主流派集団と自負する「ワスプ」(WASP = White Anglo-Saxon Protestant)に連なる「中産階級米国人」と自己を定義する。移民の多くは米国内のスラム街に定住する。「下層階級移民」として彼らを見下(ろ)す視線が育む〈階級構造〉に作家は読者ともども組み込まれていたのである(越智 5)。Maggieが刊行された1893年、イタリア人船乗り Christopher Columbus による〈アメリカ発見〉400周年を記念するシカゴ万国博覧会(以下、万博と表記)が盛大に催される。万博を通して、Columbusの〈発見〉に続く〈アメリカ開拓の歴史〉の中で「(米国建国の父祖に繋がる)北米大陸への入植者」を「欧州諸国」からの「(出)移民」と見る米国建国の歴史が〈再

発見）される（Davis 306）。中産階級米国人の自己像形成の過程に「移民」が割り込み、両者が被さる。改訂版 *Maggie* が 1896 年に出版される（Wertheim and Sorrentino, *Log* 187）。同年 11 月に実兄に宛てた手紙、その翌年 12 月に著作権代理人に宛てた手紙、の中で、NY 市中のスラム街の風物と下層階級移民の生態を取り上げた短編作品群 “Midnight Sketches” を本の形で発表する願望を作家は吐露する（Wertheim and Sorrentino, *Correspondence* 265-66, 317）。（海難事故前後の）キューバと海に対する高い関心の裏で、*Maggie* の再刊と歩を合わせて NY 市中と移民に向けられる作家の強固な意志・意識が覗き見られる。それは英国版 *OB* で実現する。同短編集は「二部構成」を取り、後半を “Midnight Sketches” が占める。

以上の考察が小論でこの後に続く議論の前提になる。*OB* とその周辺作品は NY 市中の風景と同一線上にある。Columbus・万博・移民が結合して中産階級米国人による歴史認識の再構築作業に接続する。その作業を阻む不都合な事実を隠蔽する語（騙）り手として Crane は立ち会う、と仮定する。それを立証する中で、給油係と Flanagan 双方の〈海における死〉がこの文脈で緊密に関係し合う、かつ「英雄の資質」の有無を超越した〈重要〉な役割を果たす、その現場に〈イタリア（人）〉が絡む、ことを併せて詳らかにする。

1. 移民と海

Crane 作品に立ち入る前に、それが発表された 1890 年代の米国で流布していた移民をめぐる言説を概観する。移民と「海」のイメージの癒着を見出す。1885 年に米国の風刺作家は「移民」を「無教養」（unenlightened）な人々と断定する。1890 年の著作は、「イタリア人移民」を「文明」（civilization）と無縁であるが故に米国の文明の質を貶めかねない「脅威」（a menace）と見る。関連して、1891 年の雑誌記事は、「米国にとって望ましくない移民」である「イタリア人移民」数の「増加」を指摘する。また、1896 年の年鑑は、「移民集団」を「犯罪者」（criminals）と見る。「貧困者」からなる下層階級移民を「社会秩序を危険に晒す」（endangers the social order）恐れのある存在とみなす（Appleton's 519; Bierce 117; Lodge 606; Mayo-Smith 133）。米国のジャーナリスト Jacob Riis は、スラム街で生活する移民を取材した 1890 年の著作の中で、“A map of the city, colored to designate nationalities, would show [...] more colors than any rainbow.”、と「虹の色」を例に（イタリア人移民を中核に置く）多様な移民で溢れ返る NY 市を 1890 年代の米国の都市が直面している現在進行的な混沌状態として呈示する。加えて、NY 市中のスラム街で生活するボヘミア人移民に「治安の攪乱者」（a disputer of the public peace）のイメージを重ねる。“[A man] sprang into the throng and slashed about him with a knife, blindly seeking to kill, to revenge.”、と〈劣悪な環境〉に甘んじざるを得ない現状の階級構造に対する「復讐」目的で「ナイフ」を用いた無差別殺傷行為に走る「（スラム街で生活する出自不明の）男」（[a]man）に焦点を当てる（25, 137,

265)。“blindly”は「視野の狭さ」、「理性の欠如」、「無目的性」を、不定冠詞“a”は「不特定」の殺人者からなる移民集団のイメージを、それぞれ強化する。同年、米国のジャーナリスト E. L. Godkin は雑誌記事の中で、米国社会を形成する「先達者、アングロ・サクソン人に備わった『立派な態度』」(the old Anglo-Saxon tradition of “respectability”)を賛美する一方で、既成の秩序を乱しかねない「移民」の増加に警鐘を鳴らす。別の記事では、移民人口の急増を NY 市の犯罪件数の増加と結び付けて、移民が「犯罪人口」(criminal population)を形成していると指摘する。同じ文脈で「アイルランド人移民」を「無知」(ignorant)で「文明的に劣等」(less civilized)な集団と見る (Godkin, “Criminal” 706, 709; Godkin, “Key” 422, 423-24)。1895 年の雑誌記事の中で、(後の米国大統領) Theodore Roosevelt は「(生物学的な進化論を社会の進歩理論に応用する)社会進化」(social evolution)論を援用して(文明の先進性に通じる)「進化」(evolution)の真逆、「退化」(＝墮落) (degeneration) の適例として「イタリア人」と「アイルランド人」を並置して呈示する (96)。両者の連続性が示唆される。

移民集団の多様性と不特定性は却って、米国の社会秩序の維持へ関心の目を向けさせる。中産階級米国人はその必要性を旗印に、アングロ・サクソン人的な優越思想を映す思考回路の中で、激増するイタリア人移民 (及びそれと横並びになったアイルランド人移民) に犯罪者や非文明人のレッテルを次々と貼る。これらの移民は 1890 年代の米国人口の無視できない一角を占める。対策を講じる必要のある〈望ましくない移民〉の象徴へと彼らは押し上げられたと推量される。この過程を通して、移民はしばしばヒト未満の〈モノ〉として見られる。1890 年の雑誌記事は移民を「蟻塚」(anthill)で生活する「蟻」に喩える (Oswald 2392)。同年、Riis の著作はスラム街の粗末な住居を「鶏小屋」(coop)や「(野生の獣の)巢穴」(den[s])に、その住人である下層階級移民を「ヒトの格好をした動物」(human animals)と反復的に表する (16, 54, 57, 68, 71, 86, 95, 96, 97, 153, 164, 181, 226, 251, 269)。移民を昆虫や動物と同等視する言説が当時の米国で流布する。

この言説には「海」が付き纏う。そのイメージを伴い移民たちは語られる。“The course of immigration into the United States may be pictured as a succession of waves.”、“The sea of a mighty population, held in galling fetters, heaves uneasily in the tenements.”、と彼らが米国内、及びスラム街の「共同住宅」(tenements)の中に〈流れ込む〉様子は表現される (Mayo-Smith 43; Riis 296)。共同住宅に身を寄せる下層階級移民は「波」や「波立つ海のうねり」のイメージで語られる。また、老朽化した共同住宅は「船」(“The Ship”)と呼ばれる。内部構造は「古い船」(old ship)に類似する。スラム街の「安宿」(lodging house)で眠る下層階級移民たちが立てる鼾と寝床のきしみ音は、「船上にいる」(on shipboard)感覚と「本物の船酔い」(the very real nausea of sea-sickness)に罹った錯覚を生じさせる (Riis 42-43, 87-88)。これらの比喩形象に加えて、移民にはより直接的な「海」のイメージが帯同する。

1892年と1897年の雑誌記事によると、「全移民の5分の4」が「海」からNY港を経由して米国に上陸する。その前に「法律」上の適性が審査される。移民たちは「専用のボート」(special boats)、「移送用のボート」(a transfer boat)に乗せられる。「検疫」(quarantine)の後、入国の是非が審査される。「規律」(rules)に基づく「移民の管理」(the control of immigration)が同港の担う役割として挙げられる。加えて、「文明世界」(civilized world)と非文明世界を間仕切る〈壘壁〉として期待される (Godkin, “Month” 737, 739; Senner 2, 9, 12)。移民は「海上をボートで進み選別される」イメージを帯びている。この選別を通して、米国に「脅威」を与えかねない移民の排除が期待されるのである。

Craneは同時代人 Riis の影響を強く受けている。*Maggie*を書き上げる際に彼の著作を参照している (Gullason 499-500)。また、OBを掲載した雑誌の出版元である Charles Scribner's Sons 社から、Riisの1890年の著作は刊行されている。Godkinと作家も無関係ではない。1893年4月、記事執筆の仕事獲得を目論み、雑誌編集の仕事に携わる Godkin に売り込みを掛けている (Wertheim and Sorrentino, *Log* 91)。彼（の思想的傾向）を熟知し、それに同調する作家の姿勢が垣間見える。Rooseveltと作家も無縁ではない。1896年7月、NY市の警察総監をしていた彼と会談の場が持たれる (196)。両者がイタリア人移民（と等価視されるアイルランド人移民）に対する認識を一にしていたと想像できる。これらの人脈に照らして、移民を取り巻く当時の言説と海のイメージが作家と無関係だったとは考え難い。次に、作品から作家が（イタリア人）移民に向ける視線の先に位置する「海」のイメージを具体的に掘り起こす。

2. （イタリア人）移民に向ける作家の視線と海

作品が発表された時系列に沿って、“Midnight Sketches”所収の短編作品、その前後に発表されたNY市中、及び近隣地域に題材を取ったCraneの短編作品（新聞記事）、から数点を選抜し、イタリア人移民の描かれ方に着目して移民をめぐる同時代の米国の言説との関連性を探る。合わせて、OBと“Flanagan”双方がこれらの作品と陸続きにあると見る。*Maggie*から分析を開始する。複数の移民集団が生活するNY市中のスラム街の描写で、(女主人公)Maggieが花を盗む相手として物語展開とは無関係かつ唐突に「イタリア人」(an Italian)が前景化される (1:20)。その人物の氏名、年齢、性別は不詳である。しかも、作中で1回言及されるだけである。逆説的に、拭い去り難い印象を残すこの人物からは、多種多様な出自を持つ〈移民集団〉の代表としての「イタリア人移民」の地位が透ける。また、スラム街の演芸場でかかる歌の歌詞は「海で死んだ若者」(a young man who was lost at sea)を題材とする。“The pavements became tossing seas of umbrellas.”、と傘をさす人々が行き交うスラム街の路上は「海」(seas)のイメージを伴う (1:32, 68)。

翌年、NY市の新聞に掲載され、英国版OBの“Midnight Sketches”の1番目にくる、NY市中

のスラム街の風景を切り取った短編作品 “An Experiment in Misery” では、“The roar of the city in his ear was to him the confusion of strange tongues [...]”、と（移民集団の発する）複数言語の「発声音」（tongues）が「波の轟音」（roar）に置換される。スラム街の安宿は「（野生の獣の）巢穴」（dens）の雰囲気醸す（Wertheim and Sorrentino, *Log* 101;8:287, 293）。同年に新聞配信された、炭鉱取材記事 “In the Depths of a Coal Mine”（以下、“Coal Mine” と表記）では、炭鉱労働者の姿が「NY 市中の浮浪児」（New York gamins）に重なる。同記事の草稿は、“[Italians] looked like [...] thieves. We could catch glints of the eyes, cowering aspects of the heads that made one imagine a scene in a penitentiary for bandits, murderers, and cannibals.”、と炭鉱の「底」で働く〈無名〉の「イタリア人移民」を「泥棒」（thieves）、「強盗」（bandits）、「殺人者」（murderers）、等の犯罪者、すなわち法に従わず社会規範を逸脱し攪乱する集団、として描写する。^{注3} 加えて、非文明性を象徴する「食人種」（cannibals）と彼らを見る。これらの心象を強化するように、草稿と完成稿の双方で、（移民に合致する）炭鉱労働者は食人種に類する「人肉を食らう悪鬼」（ghoul）と同一視される（Wertheim and Sorrentino, *Log* 110;8:592, 595, 604, 606）。同時代のイタリア人移民に中産階級米国人が付与した価値観を作家は共有する。加えて、NY 市中のイメージに重ねて炭鉱の「底」に押し込め（＝下位化）する。彼らを自分たちの管理「下」に置き、その「脅威」を制圧する。その間、“The crash and thunder of the machinery is like the roar of an immense cataract.”、と機械類の激しい騒音が「（海の荒波が立てる音に相当する）大瀑布の轟音」として地上に置かれた作業場を圧倒する（8:592）同年、NY 市の新聞に掲載された短編作品 “When Man Falls a Crowd Gathers” では、炭鉱の底の（イタリア人）炭鉱労働者に付随する「上下構造」をなぞるように、NY 市中の路上で突然倒れた（炭鉱労働者と同様に氏名を持たない）イタリア人を人々を取り囲む。彼らの見下（ろ）す（読者の視線に重なる）視線の背後を高架鉄道が「波の周期的な轟音」（a rhythmical roar）を上げて通過する（Wertheim and Sorrentino, *Log* 116;8:345, 347）。

同じく、NY 市の新聞に同年に掲載され、英国版 *OB* の “Midnight Sketches” の 3 番目に収められた短編作品 “The Duel That Was Not Fought”（以下、“Duel” と表記）では、NY 市中を舞台にスラム街の悪漢がキューバ人を蔑称 “Dago” でくり返し呼ぶ（8:354, 357, 358）。彼は氏名を伏せられ〈一般化〉される。際立つこの蔑称の反復と合わせて、キューバ人全般が彼に含意されているような印象を与える。Dago は 1877 年に編纂された「米国特有の単語・成句を蒐集」した辞典の中で、「イタリア人」に対して使う侮蔑語と説明される（“Dagoes”）。1910 年版の *Encyclopedia Britannica* は、それを「下層階級イタリア人移民」（the poorer class of Italian immigrants）に対して米国で広く用いられている侮蔑語と定義付ける（“Dago”）。この用法は、短編が出た 19 世紀末（を含む世紀転換期）の米国でキューバ人でありながら同時に「イタリア人移民（に準じる人物）」として理解される彼の立場を示唆する。^{注4} 作中、“savage” や “savagely” を伴って彼の未開・非文明さが強調される（8:356, 357）。同じ場面に「2 人の紳士」（two well-dressed men）が真逆の

属性を携えて登場する。彼らはキューバ人と悪漢の決闘騒ぎを収めるべく両者に、「文明の度合いが劣る（アフリカ先住民のような）相手との間で行われる交渉」（palaver）に匹敵する〈説得〉を開始する（“Palaver”）。文明の程度において、（中産階級米国人と立場を一にする）彼らを上位に置き、（イタリア人移民に重なる）キューバ人を下位化する図式が浮かび上がる。最終的にキューバ人のみ警官に連行される。それを彼らは見届ける。“[The policeman] had a distinctly business air.”、と（国家権力の代行者に等しく、その延長上にこの2年後に作家が会談する Roosevelt が控える）警官は「実務」的に業務を淡々と遂行する（8:359）。半ば機械的に移民選別の〈業務〉を行う国家権力が「キューバ人（＝イタリア人移民＝犯罪者）」をNY市中（と米国社会の表舞台）から退場させる図に転じる。

このように、複数の作品で、Crane はイタリア人移民と（それが象徴的に包含する同時代の）移民集団を中産階級米国人と同じ目線で眺める。その視線のベクトルは作品の随所に埋め込まれている。そして、舞台になっているNY市中の路上や（同市を連想させる）炭鉱の後景を海のイメージが漂う。移民と海の融合は作家自身の両者への高い関心を裏打ちしていると考えて間違いない。OBが雑誌に掲載された1897年、移民の受け入れを管轄する米国当局者がNY港の担う重大な役割である移民の「管理」（control）を改めて認識させる雑誌記事を著わしている（Senner 3）。OBと記事の時間的近接は、OBとその周辺作品内に（アイルランド人－イタリア人移民の連続性の先に見据えられる）移民全般とNY市中のイメージを散りばめた上で移民を「管理」し「選別」する戦略を合わせて織り込む作家の姿を想起させる。次に、OBとその周辺作品をこの観点から再読し、その実態を解明する。

3. OB とその周辺作品から辿る NY 市中のスラム街と移民の間の連続性

1897年1月に発表された手記“Own Story”を通じて作家の海難事故体験は初めて文字化され、（それが掲載された新聞を購読しているNY市在住の中産階級米国人を含む）読者に給油係が犠牲になる「海における死」が伝えられる（Wertheim and Sorrentino, *Log* 239;9:94）。手記の中では、ボートの4人のうち「（作家の立場が投影された）記者」（correspondent）と「料理人」（cook）の氏名は終始伏せられる。「船長」（captain）と給油係の氏名のみ開示される（9:94）。給油係に着目する。彼の氏名はWilliam Higginsと明示される。Higgins姓は「アイルランド系」に多いとされる。時代背景に照らすならば、彼はアイルランド人移民（あるいはそれに類する人物）と推察される（Hanks and Hodges 255）。この氏名は英国版・米国版OB双方の献辞の中で“THE LATE WILLIAM HIGGINS”として記載される。彼の「故人」（the late）属性が再強調される。読者に向けて、「給油係の死亡」はNY市中のスラム街の〈ありふれた〉光景の1つ「アイルランド人移民の死」にすり替えられる。

OB は長大な副題、“A Tale Intended to Be after the Fact—Being the Experience of Four Men from the Sunk Steamer Commodore” を持つ。その一部、“the Sunk Steamer Commodore” が指示する「コモドア号」を仲介して、(同じコモドア号での海難事故体験を振り返る) 手記との接続が一応示唆される。しかし、手記と異なり、コモドア号の沈没以降のボート上の場面から物語は始まる。海上から陸地を目指すボートの4人の所作に物語は焦点を当てる。給油係が愛称 Billie で複数回、会話の中で呼ばれることを除き、彼らは氏名を排して〈一般化〉される。ボートで海上を漂う原因を作った、キューバを支援する不法戦士事業に対する言及は欠落する (5:82, 83, 86, 87, 88)。表面上は手記と繋がりながら裏面で、副題 “A Tale Intended to Be after the Fact” が主張する〈虚構〉性を通じて海難事故の「事実」から OB は分断される。キューバ問題は傍らに放置され、代わって「海路を米国へ進むボート」のイメージが現出する。ボートの正確な現在地は示されない。この不安定感と彼らの正体・目的の不明瞭さと相俟って、“Own Story” で記述されるコモドア号の海難事故を遠景として見せつつ、却って〈ボートで米国へ向かう正体不明の人物たち〉という絵を読者の眼前に浮かび上がらせる。

この文脈を踏まえて、OB の読者に向けられた作家の意識を作中の説明文から炙り出す。“The mind of the master of a vessel is rooted deep in the timbers of her, though he command for a day or a decade [...].”、と「船長と船の精神的な一体感」を説明する文が、“Viewed from a balcony, the whole thing would doubtlessly have been weirdly picturesque.”、と波間を漂流するボートが「(優越な) 階上席」に陣取る〈鑑賞者〉によって「見下ろさ」れる一幅の「絵」になることを説明する文が、“Previously to the foundering, by the way, the oiler had worked double-watch in the engine-room of the ship.”、と船上での「夜間の見張り」業務を説明する文が、“It is fair to say here that there was not a life-saving station within twenty miles in either direction [...].”、とボートの4人が思い違いをしていることを伝えないと「読者に対して不公平」と説明する文が、“No mind unused to the sea would have concluded that the dingey could ascend these sheer heights in time.”、と「海事に不慣れた人々」には奇異に映る「ボートの規格外の頑強さ」を説明する文が、読者の便宜を図るように都度挿入される。ボートの4人が交わす雑談、“That’s just a winter resort hotel omnibus that has brought over some of the boarders to see us drown.” 越しに、「眺める主体」である「(避寒のためフロリダのホテルに滞在中の) リゾート客」の姿が意識される (5:68-69, 74, 76, 77, 80)。1890 年刊行のガイド本は、NY 市とフロリダを往復する蒸気船による「定期航路」(line) の絵入り広告を掲載する。“Jacksonville has become famous all over the civilized world as the great winter resort of the sunny South.”、と同ガイド本はフロリダ、特にジャクソンヴィルを喧伝する (White 75, 69)。蒸気船の発着地 NY 市在住の中産階級米国人 (読者) を典型とする「文明世界」の住人を対象とした〈文明化された〉リゾート地と謳い煽る。従って、海に精通しておらず海 (とそれを經由して米国にもたらされる移民) に余計に心奪われる、文明世界の住人と自負する、それを脅かす (イタリア人) 移民を注視する、

すなわちスラム街と移民問題に鋭い視線を向ける NY 市在住の中産階級米国人、が OB の読者に据えられる。出版元が想定する読者、彼らを取り巻く実情を作家自ら積極的に汲み取って執筆に臨んだと言える。

登場人物たちの匿名性と不法戦士事業の隠蔽に加えて、OB からは「ジャクソンヴィル」、「キューバ」の地名が削られる。代わりに、作品はジャクソンヴィルの近隣に位置する「ニュースマーナ」(New Smyrna)、「セントオーガスティン」(St. Augustine) の地名をボートの男たちが交わす会話の中で列挙する (5:74, 78)。海難事故に遭わなければ当初、“Own Story” が示すようにコモドア号はジャクソンヴィル―キューバ間を往復する予定になっていた。従って、コモドア号が本来描くべき軌跡を辿ってジャクソンヴィルに OB のボートの寄港地は設定されている、と中産階級米国人（読者）には少なくとも理解された筈である。これらの設定を巧みに利用して、作家は OB を通して移民の封じ込めを画策したと見る。その周辺作品に見られる言表をこの戦略の補完物と捉え直す。

OB は一文、“None of them knew the color of the sky.” で始まる。「彼ら」(them) は “the seven mad gods who rule the sea” に紐る (5:68, 77, 81, 84)。中産階級米国人が信仰の対象とするキリスト教的な「神」(God) と相容れない「神」(gods) を信奉する。また、記者は「外人部隊の兵士」([a] soldier of the Legion) が異国で死を遂げる詩をボート上で想起し、自身の境遇を兵士に重ねる (5:84)。読者と彼らの距離感が強化される。漕ぎ手が交代する際、ボートを転覆させないよう慎重さが求められる。漕ぎ手は壊れやすい「セーブル産のフランス高級陶器」(Sèvres) に喩えられる。また、ボート上で疲労困憊し眠る給油係と記者は「ミイラ」(mummies) として知覚される (5:72, 87)。万博では、「エジプト学の展示」(Egyptological Exhibit) の看板を掲げて「ミイラ」(mummies) が展示され、来場者の〈異国趣味〉に応じた (Don't Fail to Visit the Egyptological Exhibit)。ミイラからエジプトが連想される素地の下、(非米国的な) フランスとエジプトのイメージを纏い、ボートの 4 人は中産階級米国人から見て「他者」として扱われる。彼らの他者属性の詳細を探り下げる。

OB は冒頭で、“None of them knew the color of the sky.”、と彼らが「色を見分けることができない」状態にあると指摘する (5:68)。彼らは比喩的に判断力と理解力に通じる「物事を見定める」能力を欠く。これは、移民に特有とされた文明の程度の〈低さ〉に相通じる (Bierce 117)。連動するように、彼らは動物イメージを帯びる。ヒトより下位化された「焼き印を押された」(branded) 家畜として扱われる。「蟻」(ants) に準えられる。そして、彼らを “wild”、“wildly”、“wild colt”、“like an animal”、と荒々しさに被せて獣性を突出させる「海」が取り囲む。一方で、彼らは「浮浪児」(waifs)、「森の捨て子」(the old babes in the woods) と受け止められもする (5:69, 70, 75, 81, 83, 88)。文明の程度と獣性に重ねて、彼ら（と周囲の海）は「浮浪児」が徘徊し、「捨て子」が放置される NY 市中のスラム街（と移民）を想起させる (Riis 187, 188)。この連想は、ボートの 4 人が「獣」(brute) と表される「鷗」(gulls) に遭遇することで強化される。“You [gulls] look as if

you were made with a jack-knife.”とボートの男たちの発話を通して鵜は「(何かを切るための)道具」としての「ジャックナイフ」のイメージとともに語られる。また、夜半の見張り中に記者は「鮫」と相対峙する。“It might have been made by a monstrous knife.”と鮫は記者と「同じ」時間を過ごし、「ナイフ」による切り口に似た波紋を泳ぎながら海面に作り出す (5:71, 83)。ナイフは、NY 市中のスラム街、及びそこで生活する（潜在的な犯罪者とみなされた）不特定の下層階級移民の姿、に直結する (Riis 263)。ナイフが鵜や鮫等の「動物」に付帯している点に着眼し、この連想を更に裏読みする。ボートの4人と彼らを取り囲む海は連続しながら、同様の「動物」イメージと「スラム街の住人」のイメージで溢れている。このイメージ連鎖の中で、鵜、鮫、と共有する時間の延長上で、動物を共通項に彼らはナイフと同列に置かれる。この事象を読者と作家の双方が共有していたと考えて良い。

中産階級米国人に脅威を与える移民の〈代替品〉、とボートの4人を再定位する。作中で作家がその災厄を封じ込めるために取っている方策を探る手掛かりを、給油係に与えられる海における死に探る。給油係、記者、料理人の3人は「従順な乗組員」(obedient crew)と船長から評される。ボートの中で芽生えた「連帯感」(comradeship)によって彼らの絆は一際強化される、船長を管理者とする「従順で法を守る集団 (= 非犯罪者)」のイメージを帯びる (5:73)。物語終盤、ボートを放棄して各人は海に個別に飛び込み、陸を目指す〈個人〉に変転する。「(ボートの) 乗組員」に相応しい「従順さ」はボート自体が最早存在しないため失われる。給油係は、“The oiler was ahead in the race. He was swimming strongly and rapidly.”と「狡猾な船乗り」(wily surfman) という別称に恥じない能力を駆使し、「競走」(race)の先頭に立ち「力強く」(strongly)泳ぎ進む (5:77, 90-91)。注⁵ その間、給油係だけが他の3人と会話を全く交わさない。「集団行動の価値」を否定し、「驕心」に支配される (Solomon 174)。結果的に物語進行上、理由は表面上全く明示されず海で命を落とす。この裏を更に探る。

移民受け入れの際、「ボート」単位に仕分けて「検疫」が実施される。米国当局が管理する選別作業を経て、「ボートの乗組員 (= 従順な移民集団)」の入国が認められる (Senner 3, 9, 12)。給油係は一連の〈約束事〉から逸脱する。更に、(中産階級米国人が移民に対して期待する)法令遵守に通じる〈従順さ〉を放棄する。作中で唯一名前“Billie”で呼ばれ、潜在的に個の次元で自我意識を発揮する。また、彼が負う給油係の業務は〈物事や機構を潤滑油で円滑に回す〉役割を暗示する。中産階級米国人が構築してきた既存の(米国の文明を映す鏡となる)社会構造を、「(他を圧倒する)身体的な技量」、「(知力に通じる)狡猾さ」、「(周囲への)影響力」を行使して彼は積極的に攪乱し得る。それ故に選別の段階で排除されるべき、実際のかつ観念上の「死」に値する人物として選ばれる。給油係は浜辺で救助にあたる人物によって“What’s that?”と「モノ」扱いされる。記者は作中、溺死を「不名誉」(shame)と見る持論を展開する (5:89, 92)。上陸が叶わない給油係は、比喩的に入国を認められない、「砂」と「波」の間を仕切る「境界線」を越

えられず〈線引き〉される、ヒト未満のモノに降格させられ、「不名誉の烙印」とともに、海の向こうへ突き返される（Benfey 198）。その際、文明世界の象徴「ジャクソンヴィル」は言及されない。表舞台に出ることなく作中で包み隠される。その近郊が〈代替品〉として用いられる。この過程を通して、給油係の死と合わせて二重に中産階級米国人の拠り所とする文明世界は移民の脅威を防御しているのである。

“Flanagan” の主要登場人物、Flanagan が給油係の死を補完し、内在する意味合いを強化する。彼の死（とそこに至る経緯）を給油係の死と結び付けて再読する。姓は記されるが、Flanagan の名前は不明で半分匿名である。Flanagan 姓は Higgins 姓と同様に「アイルランド系」に多いとされる（Hanks and Hodges 185）。作中、Flanagan は不法戦士事業に携わる船の「船長」（captain）を務める。彼は特定可能な個人よりもむしろ、アイルランド人移民を想起させる「船長」として〈一般化〉される。彼は上役からの問い掛けに対して、“[Flanagan] didn't know [...]”、“[Flanagan] don't know [...]”、と返答し続ける。この「（不法戦士事業の本質を理解しない）無知さ」を塗り重ねるように、不法戦士事業に参加する動機を無目的な「戯れ」（just for fun）と回答する（5: 94, 95）。Flanagan を筆頭にした船全体の知的水準の低さが暗示される。それに直結する「無知さ」が動物イメージの形を取って語られる。同船するキューバ人、そして船で働く火夫たちは“twenty cow-eyed villains”、“[The stokers] rolled their eyes like hurt cows.” と、「牛」（cow[s]）に転じられる。Flanagan は「子羊のような目」（lambkin's eyes）をし、「マスティフ犬のように」（like a mastiff）振る舞う。彼の発声には“roar”、“roaring”、“roared”、“bellowing”といった表現が付随し、「（野獣や牛などが）吠える・大声で鳴く」様子に喩えられる。彼の帽子は“He was as astonished as if his hat had turned into a dog.”、と「犬」に変わる。機関室で稼働している機械類は“many steel animals”、と「動物」の集合体と化す。船が沈む様子は“When finally the *Foundling* sank she shifted and settled as calmly as an animal curls down in the bush grass.”、と「身体を丸めながら倒れ込む動物」に変貌する（5: 93, 95, 96, 97, 103, 104）。

Flanagan が指揮を執る船の名称、ファウンドリング号は同時に「捨て子」（foundling）を意味する。“You [Flanagan] are like the captain of a pirate ship.”、と不法戦士事業という文脈で、同船しているキューバ人から「海賊行為」（pirate）と関連付けられる。また、“At night the *Foundling* approached the coast like a thief.”、と宵闇の中を「泥棒」のようにキューバの岸辺を目指して船は進む（5: 96, 100）。これらの犯罪イメージは 1877 年に編纂された「米国特有の単語・成句を蒐集」した辞典に見受けられる「不法戦士」と「強盗・海賊」を同義に扱う用法に則っていると考えて良い（“Filibuster”）。ここで 1897 年に発表された当時の不法戦士事業の実態を取材した Crane の新聞記事“Filibustering Industry”に目を向ける。記事はこの定義通り、キューバを対象とした不法戦士事業を「法律を無視した行為」（outlawry）と記す。加えて、同事業を語る際に「NY 市」にわざわざ言及する（9: 95, 99）。同事業に高い関心を抱く同市在住の中産階級米国人に作家が配

慮した結果と想像される。Flanagan が従事する同事業はキューバ人を積んでキューバから米国へ戻る途上、船の沈没で破綻する。Flanagan は海における死の犠牲者となる。“Coal Mine”と“Duel”の考察から顕著なように、同時代の中産階級米国人的な価値観に基づき、作家はイタリア人移民を「泥棒」や「強盗」等の犯罪者として眺め、かつキューバ人と同列視する。「キューバ人」、「イタリア人移民」、「犯罪者」を繋ぐ連関の中で、Flanagan は不法戦士事業の用途で使われる船の船長として比喩的にキューバ人（＝イタリア人移民）を米国に招き入れる役割を担う。OB でボートの男たちに付与される「捨て子」のイメージに、文字通り「捨て子」と名付けられた船名は結びつく。動物イメージの多用と合わせて、Flanagan と彼の船（と乗員）が備える、母国を「捨て」て新天地を目指す文明的に劣った、犯罪者の混在する、移民との〈近接性〉が鋭く暗示される（5: 83）。

Flanagan は “Later there floated to them a body with a calm face of an Irish type.”、と波間を漂う「死体」（a body）と表される。命の宿らない「モノ」として「無力化」される。外部からの脅威を遮断する「避難所」（shelter）と形容される「ホテル」に滞在中の（フロリダのガイド本が読者とする中産階級米国人観光客たちに等しい）客がそれを発見する（5:108）。「アイルランド人の典型」（an Irish type）は補足説明的に Flanagan の死を仄めかす。裏で、アイルランド人－イタリア人移民の連続性から敷衍して非ワスプ的な移民集団全般の「死」と再秩序化への読み替えを可能にする。OB で呈示される〈個人〉レベルの〈海における死〉は“Flanagan”の中で〈集団〉レベルへ拡大される。両短編は、下敷きにしている作家の海難事故体験を〈虚実織り交ぜながら越境〉する。“Midnight Sketches”を収録し「二部構成」を採用する英国版 OB が含意する、海と NY 市中の象徴的な結合と連動する。同時代の NY 市中のスラム街と移民を取り巻く「管理」と「選別」の課題と連携を密にする。調整役（＝給油係）と舵取り人（＝ Flanagan）の双方を「殺す」ことで移民を封じ込める仕掛けを凝らす。読者の関心と期待に寄り添う〈戦略〉を埋め込んだ物語（騙り）として読まれ得る。

4. Columbus の解体と再構築に伴う〈再発見〉される歴史

19 世紀末の米国における移民封じ込め戦略は、「（特定の）移民」が「米国の文明の質を落とす」ことを阻止するワスプ寄りの大義名分と表裏一体の関係にある（Mayo-Smith 133）。米国の〈その時点〉での文明の到達度を顕示する、歴史を主題とする（かつ米国の歴史的変遷に光を当てる）一大行事が 1893 年にシカゴで催された万博である（Davis 308）。同年に刊行された公式ガイド本は、Columbus の名前を冠した “World’s Columbian Exposition” と万博を呼び表すとともに、米国独立（と建国）100 年の節目を祝い 1876 年にフィラデルフィアで催された国際博覧会と同一視する（Flinn 27）。中産階級米国人の起源、建国の父祖と Columbus が重なり合う。Columbus の〈発

見」と〈米国建国〉の歴史が接続する。万博開催に合わせて、Columbus を特集する書籍・雑誌記事が 1893 年前後の米国で集中する。当時の中産階級米国人（読者）の関心の高さを窺わせる。活字化され〈再生産〉される Columbus（の業績）は他方、（イタリア人を筆頭とする）移民流入の結果として生じた米国社会の揺らぎを彼らに気付かせる。万博を通じて米国の文明の高さを再認識する、〈非文明〉の代名詞である「望ましくない移民」を米国から駆逐する、この原動力の〈アイコン〉として Columbus は期待されたと考えて良い。以下、万博が催された 1893 年を起点（基点）にして、1890 年代の米国における Columbus 受容の様態を明らかにする。その現場に Crane の OB とその周辺作品がどのような形で参画したかについても論議する。

この時期、米国で刊行された数多の書籍・雑誌記事が万博と「歴史」の関連性を強調する。1892 年に発行された万博のガイド本は、表題 *The Historical World's Columbian Exposition and Chicago Guide* に明示されるように、「歴史に関する」(historical) 行事としての位置付け、「(米国を取り巻く) 世界の過去と現在 (を貫く歴史)」(the world's past and present) を来場者に示す万博の精神、を鋭く指摘する (Morgan 5)。この本質を突くように、同時期に Columbus の「イタリア」出自と「歴史」に光が次々と当てられる。雑誌記事は同年、その見出し「Columbus 賞賛」の下、〈アメリカ発見〉を「イタリア人 (= Columbus)」が成し遂げた偉業と見て、Columbus の (イタリア人の) 血の中を「イタリア (人) 的な思考と信念」(Italian thought and faith) が流れている、とする (“Columbus Celebration” 187)。同年、米国の歴史学者は Columbus 研究書を著す。その中で、全社会層出身の「愚者」を満載した「愚者の船」の乗客の愚行を列挙する 15 世紀のドイツ風刺詩人 Sebastian Brant による 1494 年の詩作品 *Ship of Fools* が言及される。英国詩人 Alexander Barclay が 1509 年にそれを「英訳」する。歴史上、英語圏世界に Columbus の〈発見〉が紹介された瞬間、と同研究書は解説する (Winsor 537-38)。1896 年から翌年にかけて刊行された「歴史」書は Brant の詩に別角度から説明を加える。「愚者の船」(ship of fools) の乗員 (= 愚者) は彼らの行動規範を制御する「羅針盤も海図も持たない」(without chart or compass)、無目的で逸脱行動に走りやすい「無秩序」(chaotic) の象徴、〈既成の社会構造を惑乱する者〉、と位置付けられる (Dyke 277-78, 312)。万博開催と並行して、Columbus (の業績) を「歴史」の文脈から見直す行為に読者の注意は傾いたと考えて良い。「愚者の船」の連想を介して、イタリア人移民に対する負のイメージと Columbus が連続する「歴史」が露呈する。この文脈に置くことで、1888 年に雑誌に掲載された雑文、“The first assisted Italian immigrant to this country was a person named Christopher Columbus.” は新たな意味を帯びる (“First Assisted” 441)。米国にとって「望ましくない」移民の典型にして非ワスプ的な移民集団を代表する「イタリア人移民」の「始祖」という側面を、〈歴史を歪曲〉して Columbus は持ち合わせる、とされる。

これらの言表と同時進行的に、当時の書籍・雑誌記事は Columbus に付随する〈イタリア (人)〉属性を巧みに隠蔽する。1892 年の雑誌記事は「勇敢な船乗り」(gallant mariner) と Columbus を

認めつつも、米国の発展の出発点を後世の「(ワスプに連なる)入植者たち」に置き Columbus と 19 世紀末の米国の間の断絶を強調する。また、記事は「イタリア (人)」に一切言及しない (Davis 306)。翌年に刊行された万博の公式ガイド本は、イタリア外国館に陳列されている特別展示品として「1448 年の世界地図」(a paper of 1448) を挙げる (Flinn 140)。これは Columbus による〈発見〉以前の世界地図で、〈アメリカ〉は未記載である。つまり、〈特記〉すべきイタリア展示の項目から Columbus の〈アメリカ〉に係る業績は抹消されている。連動して、万博の開幕を祝う Grover Cleveland 米国大統領の「演説」を掲載した雑誌記事では、“World’s Columbian Exposition”ではなく「国際博覧会」(the World’s Fair)と万博は呼ばれる。Columbus、及びイタリア (人)に関する文言はいずれも欠落する。加えて、“[W]e exhibit the unparalleled advancement and wonderful accomplishments of a young nation [...]. We have made and here gathered together objects of use and beauty, the products of American skill and invention; we have also made men who rule themselves.”、と演説は Columbus が関与した業績を巧みに迂回して、中産階級米国人の代表者、Cleveland 大統領を頂点とする米国の構造を示す。今日の米国の土台となる「進歩発達」(advancement)と無数の「業績」(accomplishments)が中産階級米国人の尽力の賜物であることを誇示し、歴史の再確認がなされる。中産階級米国人を“we”で一括りにして「自己統治」(rule themselves)する、すなわち自ら「規律を生み出し運用」する、集団と規定して自己の再確認がなされる。その上で、相容れない価値観を有する〈他者 (= 移民)〉と一線が画される (“President Cleveland’s Address” 129)。^{注6} Columbus と陸続きのイタリア人移民に代表される非ワスプ的な移民集団全般を万博から締め出す。中産階級米国人が万博の担い手として前面に出る。万博を契機に、彼らを中心に米国の結束が推進される。移民の受け入れの際の「管理」と「選別」を「規律」通りに執行する検疫に準じるこの「権力装置」の作用の中で(他の移民と同じように)Columbus は締め出される(吉見 265)。

歴史の〈改変〉に伴い生じた等号による〈イタリア人移民 Columbus〉が明示する脅威としての Columbus 像は呈示と同時に、Cleveland 的な〈別の歴史〉の伏流に沿って回収される。捏造された無害性が現前化する。1885 年に雑誌に掲載された(当時の世相を色濃く映す)風刺画 “Columbus Cleveland and His Mutinous Crew” の中で、「Cleveland 米国大統領と Columbus の結合」が図像化される。Columbus 的な舞台設定が後景に借用される。船上、(海図を持たない愚者の船の乗員とは異なり)「海図を手にした Cleveland が他の乗員に指示を出す。Columbus の位置に主体 Cleveland が鎮座する。英国人(アングロ・サクソン人)の出自を表す記号、Cleveland 姓を付与され Columbus Cleveland の名の下、「ワスプ」の系譜に Columbus は組み入れられる (Hanks and Hodges 114)。同年、外国人契約労働者の米国への受け入れを制限する法律 “the law prohibiting the importation of laborers under contract” が制定されている (Mayo-Smith 276)。1894 年の “Coal Mine” の中で、Crane は移民労働者に犯罪者の影を見る (8:606)。(スラム街でナイフ

を振り回す下層階級移民に通じる）社会秩序から逸脱する恐れのある移民労働者を牽制する移民制限法の先駆と同法は位置付けられる。同法に投射される中産階級米国人寄りの時代精神をClevelandは共有し、Columbusと米国建国の父祖、彼らにまつわる複層的な歴史を繋ぐ〈ハイブリッド〉な図像の主役の地位に収まる。Columbusの「偉大さ」は、（移民労働者の排斥を唱える運動から敷衍して〈脱〉イタリアを掲げる）中産階級米国人の代弁者（= Cleveland）へ巧妙に継承される、新たな歴史的意義を伴って〈再発見〉される（Davis 306; Lewis 4）。^{注7}その上で、「新しい文明」（a new civilization）の表明を企図する万博精神が待望する同時代米国の理想形、その〈アイコン〉として期待されたのである（Bunner 404）。Columbusの〈解体〉と〈再構築〉を取り巻くダイナミズムにOBとその周辺作品はどのように関わったか。次にこれを検討する。

1893年の雑誌記事は、Columbusの探検を支えた「精神」を“inborn spirit of adventure”、と「冒険」と絡めて言い換える（Duke of Veragua 113）。米国版OBの表題*The Open Boat and Other Tales of Adventure*は、収録されているOBと“Flanagan”が「冒険」の範疇に入ることを示唆する。“The three vessels which have made themselves great names because of their services to the Cubans are the Dauntless, the Three Friends and the Commodore, which was lately foundered at sea.”、と“Filibustering Industry”は不法戦士事業で使用される船を3隻列挙する（9:96）。作家が乗船する「コモドア号」と同列に「ドントレス号」が置かれる。“the dauntless courage of Columbus”、と1892年に刊行されたColumbusの業績を讃える著作はColumbusを「勇敢」（dauntless）な精神の持ち主と形容する（Lewis 4）。コモドア号はこの並列関係においてColumbusの属性を帯びていたと推定される。OBと“Flanagan”はColumbusに繋がる。この視座から、両短編を再読する。

OBでは、衣服を脱ぎ捨てて記者たちの救助に向かう男性が登場する。“He was naked, naked as a tree in winter [...]”、とこの人物は表現される（5:92）。「裸」で「木（＝ヒト未満のモノ）」と等価視される彼に記者は遭遇する。この描写は1889年の伝記本に見られる、Columbusが探検の途中、島に「上陸した」（touched the land）際に出くわす、珍奇な「形」に焦点化された「モノ」（figures）として知覚される「裸の原住民」（some naked figures）に重なる（Belloy 123）。また、ボートの4人は、“What’s that idiot with the coat mean?”、“What do you suppose he means?”、“It don’t mean anything.”、と目に入る事物に対して動詞“mean”越しに「意味を付与する」作業に熱中する。物語進行上、陸地から送られる合図に対する解読作業にこれは一致する。そして、救助された後で、「解釈する側」（interpreters）と自己規定するに至る。〈発見〉を重ね、次々と意味付けを行う探検者Columbusの身振りとは共振する（5:80, 92）。一方、“Flanagan”は、キューバ人同士の会話を「（北米）先住民間の話し合い」（pow-wow）と表現する。不法戦士事業はキューバ（人）と不可分の関係にある。それに携わる「船長」は“the captain of a pirate ship”と表される（5:93, 100）。「海賊」は同時代の犯罪イメージを代替的に喚起するに留まらない。「キューバ人（＝先住民）」を相手に比喩的に「海賊」行為を働く〈搾取の物語〉が浮上する。「Christopher Columbus 船長」

(Captain Christopher Columbus) による〈アメリカ発見〉、それに続く先住民支配の歴史を鑑みると、Flanagan と Columbus の立場は時空を超えて交差し合う (“Ocean Steamers” 291)。

OB、“Flanagan” 双方とも、本来の目的である「冒険」に等しい不法戦士事業を完遂できない。海における死で幕を閉じる。給油係 (= Billy Higgins) と船長 (= Flanagan) の上陸は叶わない。アイルランド系の姓を持ち、(半) 匿名性故にアイルランド人移民全般へと〈一般化〉が可能な両者は不法戦士事業の途中で落命する。アイルランド人－イタリア人移民の置換図の中で、米国のイタリア人移民の始祖とされる Columbus は象徴的に「これらの死」の中に搦め取られる。“Duel” で検証してきた、NY 市中のスラム街に見られる「下層階級イタリア人移民」を表する蔑称 “Dago” は、19 世紀末 (世紀転換期) において「イタリア人船乗り」(Italian sailors) の意味も内包し、アイルランド人－イタリア人移民の同一線上に接続する (“Dago”)。〈イタリア人船乗り〉の 1 人、Columbus が成し遂げた〈アメリカ発見〉に代表される〈探検〉は〈歴史的偉業〉として当時の中産階級米国人に遍く了解されていた筈である。“Flanagan” は次の一文、“The expedition of the *Foundling* will never be historic.” で終わる (5:108)。「歴史に足跡を残す」(historic) ような「探検」には遠く及ばない、と記される。Flanagan を Columbus と同一視する等式は Columbus を〈再構築〉する。Flanagan – Columbus による〈もう 1 つ〉の 19 世紀末的な〈探検〉は「歴史」上から抹消される。連動して、短編の副題 “His Short Filibustering Adventure” はこの「冒険 (探検)」の「短さ」、「不充分さ」を暗示する。一層強調されるこの不達成感の意義を掘り下げるため、“Filibustering Industry” に再び目を向ける。

“The same lad who longs to fight Indians and to be a pirate on his own account longs to embark secretly at midnight on one of these dangerous trips to the Cuban coast.”、と「若者」の口を借りて、不法戦士事業を「海賊」(a pirate) によるキューバ (人) への〈侵略行為〉と認めた上でキューバ人を「アメリカ先住民」(Indians) と等号で結ぶ (9:97)。この等式は “Flanagan” で確認された、不法戦士事業の本質を踏襲する。キューバに向かう途中、船が沈没してボートで陸地を目指す OB、キューバからの帰途、船が沈没する “Flanagan” はいずれも、表層の物語の内奥でこの若者が発する等式に「当て嵌められ」た〈別の物語〉を同時展開している。Columbus の〈アメリカ発見〉は、「アメリカ先住民 (= 既得権益の享受者)」の間に、自らが築き上げた生活圏と地位が「海賊 (= 新参者)」同然の Columbus (と彼に続く入植者たち) によって略奪される恐怖を揺り起こす。〈アメリカ = 米国〉は 19 世紀末に同じ事態に直面する。「(海賊を含む) 犯罪者」に合致する「イタリア人移民」によって米国の既存の社会構造が「攪乱」され崩壊する危機を前にして、その主軸をなす中産階級米国人は不安定感に囚われる。〈非文明勢力による文明国家への侵略〉という立場で Columbus – イタリア人移民は重なる。事実の混じった〈虚構〉として、作家 (あるいは時代) からの要請を受けて、船－ボートは両物語で沈む。OB の登場人物たちは「海に飛び込む」(tumbled into the sea) よう仕向けられる (5:89)。「沈む」ことで (イタリア人) 移民による米国侵略計画の「頓挫」

が仄めかされる。船上（またはボート上）から海中へ「飛び込む」行為は〈下向き〉のベクトルを伴う。〈海における死〉がそれを取り込み演出される。強弱うねって相くり返す波の波動が暗示する時代の蠢きと共鳴するように、中産階級米国人を上位化するイメージが短編の随所に浮沈する。それは（イタリア人）移民による攪乱を回避すると同時に、その根幹をなす Columbus そのものを解体する物語である。“Columbus Cleveland” が表徴する、ワスプ主導の〈規制（既成）の枠〉に嵌めて無害化（＝秩序の回復）を図る。その上で、ワスプが舵を切って新たな文明を米国に積み重ねる。OB とその周辺作品は、自然主義文学を標榜する一方、その裏で時代と交差する諸相を〈語（騙）り〉連ねる。給油係、Flanagan、Columbus の〈（非）英雄性〉を解体・再構築する。（同時代の NY 市在住の）中産階級米国人（読者）の優越を担保する。〈ボートの 4 人－アイルランド人－イタリア人移民－Columbus－イタリア〉の連続性と錯綜する自己像の「波」間で、語（騙）りが交錯する〈多視点的〉なアプローチを通して作品はこの過程に与する。

お わ り に

“No man, nor dog, nor bicycle appeared on the beach.”、と OB は海上に位置するボートから遠く離れた砂浜に言及する（5:88）。「自転車（の不在）」がボートの 4 人の眼前に置かれた解釈すべき対象になる。作家は「自転車（乗り）」が行き交う光景を、NY 市中の風物を取り上げた記事にまとめて、海難事故に遭うわずか半年前、1896 年に新聞に発表している（Wertheim and Sorrentino, *Log* 191）。^{注 8} この記事が OB の砂浜の描写に影響を及ぼしている、と考えても強ちの外れではない。自転車を通してボートの 4 人は同市中を幻視する。この観点から、OB とその周辺作品を眺め返して小論を閉じる。

記事は、市中を走る「自転車乗り」（wheelmen, wheelwomen）を「2 から 5 か国語」（from two to five languages）で罵る警官たちを紹介する。自転車（乗り）の中に（イタリア人移民に象徴される）非ワスプ的な移民集団が混在する市中の風景が顕在する。「船の舵手」（wheelman）に読み替え可能な自転車乗りたちは船（とその先に存在する海）のイメージを喚起する。市中の公道が「競走路」（speedway）になる。“Down at the Circle where stands the patient Columbus, the stores are crowded with bicycle goods.”、と屹立する「Columbus 像」を取り囲む「Columbus 広場」（the Circle）が競走路に組み込まれる（8:371, 372）。この像が象る記念碑は NY 市在住のイタリア人が 1892 年に寄贈し、その場所に設置された（Wilson 57）。記事は Columbus 像について多くを語らない。「偉大な発見者」（[t]he great discoverer）と説明付けるが、具体性を欠く。「イタリア」、「アメリカ発見」には一切触れない（8:371）。Columbus は記事の主役ではない。風景の一部、自転車乗りたちにとっての単なる目印の 1 つ、に過ぎない。不動の姿勢を保つ立像は自発的な行動を封じられ受け身の姿勢に甘んじる。土台は「灰色の柱体」（grey shaft）によって構成される（8:

371)。「灰色」は(記事が書かれた 1896 年時点での)経年劣化に加え、その像が持つ本来的な意味の喪失を仄めかす。この風景を作家は意識的に切り取る。それは、半年経って実体験する海難事故から派生する OB とその周辺作品の中で、「解釈する側」の立場から〈実(体)験〉的に再〈想像／創造〉され、NY 市中の(スラム街の)風景と海(における死)を繋ぐ原風景になったと考えられる(5:92)。

旧来的な作品論は OB を高く評価しつつ、“Flanagan”を殊更に軽視する傾向にある。批評の網の目から零れ落ちる OB とその周辺作品は相互に補完し合い、同時代の米国が置かれていた社会情勢と密接に関わる。移民と海をめぐる同時代の言説と絡めて作品と〈海における死〉を捉え返す作業を通じて、小論ではそれを詳らかにした。そこから逆照射することで、両短編を越えて Crane 作品全体に新しい光が当てられ得る。1890 年代の NY 市中に専ら重心を置いて、〈中産階級米国人、対、(イタリア人)移民の覇権争い〉に特化する論議からは移民受容を取り巻く多様性(と多義性)が遺漏する。補遺的な論究が求められる。しかし、小論の成果を基に、旧来の研究が看過した、Godkin や Roosevelt 等の同時代人、意図する読者と当時の出版界、と作家との関係、更にはこの文脈における Hemingway に及ぼした(かもしれない)影響力、を掘り起こすことで Crane 作品群を新たに再配置(評価)する道が開かれるのは間違いない。

注

- 1 以下、小論で取り上げる著作・雑誌は全て中産階級米国人を読者に想定する。なお、特に断りがない場合は米国で出版されたものとする。
- 2 Crane 作品からの引用は、ヴァージニア大学出版『Stephen Crane 全集(全 10 巻)』を使用した。巻数と頁数を括弧内に記す。なお、小論中の下線は全て筆者による。
- 3 筆者は、Crane 作品に表れる「犯罪(者)」イメージを、移民封じ込めを目論む作家の戦略として論じている(増崎,「Stephen Crane のスラム表象と監獄」19-34)。
- 4 筆者は、世紀転換期米国の帝国主義運動という文脈からこのキューバ人の役割を考察している(天理大学アメリカス学会編 140-52)。
- 5 Crane は 1895 年に自身の出世作となる中編作品 *The Red Badge of Courage* を発表する。主人公 Henry Fleming が「戦線逃亡」して激走する様子は「競走」(race)と表される(2:42)。後続の友軍の兵士たちは敵弾の犠牲者として供出される。この公式に当て嵌めるならば、OB で展開される「競走」は〈先頭に立つ給油係が既存の中産階級米国人の地位を侵害する図〉として絵解きが可能である。
- 6 Riis の 1890 年の著作の表題 *How the Other Half Lives* は、スラム街の下層階級移民を「他者」(the other half)と見立てて中産階級米国人(読者)の前に〈線〉を引いて呈示する。この振る舞いと大統領の演説内容は連続性を持つ。
- 7 移民労働者を規制する法律は 1885 年 2 月に成立する。従って、より厳密に言えば Cleveland は同法が成立してから 1 ヶ月後に大統領に就任する。
- 8 筆者は、当時の米国における自転車流行の実状を反映する資料と位置付けて、社会文化的な角度からこの新聞記事を再解釈している(増崎,「19 世紀末の米国における円環の構図」1-19)。

引用文献

- Appleton's Annual Cyclopedia and Register of Important Events of the Year 1896*. NY, 1899.
- Belloy, M. Le Marquis. *Christopher Columbus and the Discovery of the New World*. New ed. Philadelphia, 1889.
- Benfey, Christopher. *The Double Life of Stephen Crane*. NY: Alfred A. Knopf, 1992.
- Bierce, Ambrose. *The Unabridged Devil's Dictionary*. Ed. David E. Schultz and S. T. Joshi. Athens: U of Georgia P, 2000.
- Brown, Bill. *The Material Unconscious: American Amusement, Stephen Crane, and the Economies of Play*. Cambridge: Harvard UP, 1996.
- Bunner, H. C. “The Making of the White City.” *Scribner's Magazine* 12 (1892): 399-418.
- Cady, Edwin H. *Stephen Crane*. Boston: Twayne, 1962.
- “The Columbus Celebration.” *American Advocate of Peace* 54.8 (1892): 187-88.
- “Columbus Cleveland and His Muttinous Crew.” Comic Strip. *Puck* 18 (4 November 1885): Centerfold.
- Crane, Stephen. *The Open Boat and Other Stories*. London, 1898.
- ―. *The Open Boat and Other Tales of Adventure*. NY, 1898.
- ―. *The University of Virginia Edition of the Works of Stephen Crane*. Ed. Fredson Bowers. 10 vols. Charlottesville: UP of Virginia, 1969-76.
- “Dago.” *The Encyclopedia Britannica*. 11th ed. NY: Encyclopedia Britannica Company, 1910.
- “Dagoes.” *Dictionary of Americanisms: A Glossary of Words and Phrases Usually Regarded as Peculiar to the United States*. 4th ed. Boston, 1877.
- Davis, George R. “The World's Columbian Exposition.” *North American Review* 154 (1892): 305-18.
- Don't Fail to Visit the Egyptological Exhibit. Advertisement. 1893.
- The Duke of Veragua. “The Family of Columbus.” *North American Review* 157 (1893): 113-19.
- Dyke, Paul Van. *The Age of the Renaissance: An Outline Sketch of the History of the Papacy from the Return from Avignon to the Sack of Rome (1377-1527)*. 1896-97. NY: Scribner's, 1900.
- “Filibuster.” *Dictionary of Americanisms: A Glossary of Words and Phrases Usually Regarded as Peculiar to the United States*. 4th ed. Boston, 1877.
- “The First Assisted.” *Puck* 23.598 (1888): 441.
- Flinn, John J. *Official Guide to the World's Columbian Exposition*. Chicago, 1893.
- Godkin, E. L. “Criminal Politics.” *North American Review* 150 (1890): 706-23.
- ―. “A Key to Municipal Reform.” *North American Review* 151 (1890): 422-31.
- ―. “A Month of Quarantine.” *North American Review* 155 (1892): 737-43.
- Gullason, Thomas A. “The Sources of Stephen Crane's *Maggie*.” *Philological Quarterly* 38 (1959): 497-502.
- Hanks, Patrick and Flavia Hodges. *A Dictionary of Surnames*. NY: Oxford UP, 1988.
- Hemingway, Ernest. *Green Hills of Africa*. NY: Scribner's, 1935.
- Katz, Joseph, ed. *Stephen Crane in Transition: Centenary Essays*. Dekalb: Northern Illinois UP, 1972.
- Knapp, Bettina L. *Stephen Crane*. NY: Ungar, 1987.
- Lewis, John F. *Christopher Columbus: A Short Oration*. Philadelphia, 1892.
- Lodge, Henry Cabot. “Lynch Law and Unrestricted Immigration.” *North American Review* 152 (1891): 602-12.
- Mayo-Smith, Richmond. *Emigration and Immigration: A Study in Social Science*. NY: Scribner's, 1890.
- Monteiro, George. *Stephen Crane's Blue Badge of Courage*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 2000.
- Morgan, Horace H. *The Historical World's Columbian Exposition and Chicago Guide*. St. Louis, 1892.
- “Ocean Steamers.” *North American Miscellany* 1 (1851): 289-95.
- Oswald, Felix L. “American Auguries.” *The Open Court* 4.151 (1890): 2392-93.

- "Palaver." *The Encyclopedia Britannica*. 11th ed. NY: Encyclopedia Britannica Company, 1911.
- "Pow-Wow." *Dictionary of Americanisms: A Glossary of Words and Phrases Usually Regarded as Peculiar to the United States*. 4th ed. Boston, 1877.
- "President Cleveland's Address at the Opening of the World's Fair." *American Advocate of Peace* 55.6 (1893): 129.
- Riis, Jacob A. *How the Other Half Lives: A Study Among the Tenements of New York*. NY: Scribner's, 1890.
- Robertson, Michael. *Stephen Crane, Journalism, and the Making of Modern American Literature*. NY: Columbia UP, 1997.
- Roosevelt, Theodore. "Degeneration and Evolution: II. Kidd's 'Social Evolution.'" *North American Review* 161 (1895): 94-109.
- Senner, Joseph H. "The Immigration Question." *Annals of the American Academy of Political and Social Science* 10 (1897): 1-19.
- Solomon, Eric. *Stephen Crane: From Parody to Realism*. Cambridge: Harvard UP, 1966.
- Sorrentino, Paul. *Stephen Crane: A Life of Fire*. Cambridge: Belknap, 2014.
- Weatherford, Richard, ed. *Stephen Crane: The Critical Heritage*. Boston: Routledge and Kegan Paul, 1973.
- Wertheim, Stanley, and Paul Sorrentino, eds. *The Correspondence of Stephen Crane*. 2 vols. NY: Columbia UP, 1988.
- . *The Crane Log: A Documentary Life of Stephen Crane, 1871-1900*. NY: G.K. Hall, 1994.
- White, Joseph W. *White's Guide to Florida and Her Famous Resorts*. Jacksonville, 1890.
- Wilson, Latimer J. *My Trip to New York: Notes and Impressions*. NY: F. M. Buckles, 1906.
- Winsor, Justin. *Christopher Columbus and How He Received and Imparted the Spirit of Discovery*. Boston, 1892.
- 越智道雄『ワスプ（WASP）—アメリカン・エリートはどうつくられるか』東京：中央公論社、1998。
- 天理大学アメリカス学会編『アメリカス世界のなかの「帝国」』奈良：天理大学出版部、2005。
- 増崎恒「19世紀末の米国における円環の構図 —Stephen Crane、ツーリズム（リスト）、(車) 輪の力学—」『追手門学院大学国際教養学部紀要』10（2017）：1-19。
- 「Stephen Crane のスラム表象と監獄 —移民恐怖と 19 世紀末犯罪者論」『アメリカ文学研究』41（2005）：19-34。
- 吉見俊哉『博覧会の政治学 —まなざしの近代—』東京：中央公論社、1992。

